



雲青志

さいたま市立大成中学校 学校だより

12月号 令和6年12月2日

補助輪を外す時

校長 福田博志

先日、天気が良かったので久しぶりにサイクリングを楽しみました。サイクリングと言っても、普通の自転車（ママチャリ）で近所の土手を走っただけですが、爽快でした。自力で漕いで風を切るのもなかなかいいものですね。

皆さんは、自転車の補助輪を付けなくても乗れるようになった時を覚えていますか。自転車の後ろを誰かに支えてもらい、今にも倒れそうになりながら、不安を抱えながら、練習した経験があるでしょう。補助輪なしで乗れるようになった瞬間は、本当にうれしかったのではないのでしょうか。後ろで支えてくれた保護者様は、一日も早く自転車に乗れるようにと、お子さんと一体となって、倒れないように支えたあの頃が懐かしいことでしょう。その頃から思えば、中学生の皆さんは、一段と立派に成長されたことと思います。



自転車の運転を人生にたとえた偉人がいます。『相対性理論』などで世界的な権威をもつ科学者アルベルト・アインシュタインです。次の名言を残しています。「人生とは自転車のようなものだ。倒れないようにするためには走らないといけない。」と。私は、何かを気付かされる言葉であると感じました。「人は自立に向かって、自分で行動（運転）しなければならない。それをやめてはならない。」とも聞こえてきます。とは言っても、自立のために補助輪（保護者、教師の支援や助言）は、必要だと思えます。しかし、いつまでも補助輪を付けておくわけにはいきません。いつかは、外す時が来ます。その外す機会があるのが、中学時代だと思っています。中学校を卒業して3年で成人しますので、保護者や教師の補助輪を徐々に外して、自分で運転できるようにしてあげなければなりません。

そのことに関連して、さらに調べていくとスウェーデンの教育学者エレン・ケイに出会いました。『児童の世紀』を執筆され、「教育の最大の秘訣は、教育しないことにある。」と、19世紀に出版されながらも、斬新な響きを与えてくれます。また、「バラのとげは最初から絶対に抜いてあげてはいけない。」とも語っており、「どのような発達段階であっても、子どもには、ありのままの現実を体験させるようにすべき」と力説されています。『児童の世紀』では、幼児教育の重要性が説かれており、国際的にも大きな反響を引き起こし、この影響を受けて「世界人権宣言」（1948年）や「子どもの権利宣言」（1959年）に引き継がれたと言われています。

世界人権宣言に基づく人権週間が12月4日から始まります。いじめや虐待など子どもの人権問題としっかり向き合っていかなければなりません。中学生が大人に向かって自立していくこの時期（補助輪を外すとき）を真正面から受け止め、このことを念頭においた学校づくりをしていく大切さを実感しています。

今年、保護者・地域の皆様には、たいへんお世話になり、ありがとうございました。